



2代会頭 鷹司信輔 TAKATSUKASA Nobusuke

1889 (明治 22) - 1959 (昭和 34). 会頭在任期間 1922 - 46

唐沢孝一 (都市鳥研究会)

鳥 15 (73) 1959 年より転載

1889 (明治 22) 年東京麹町で生まれる。鷹司家は「藤原鎌足公 24 世の嫡孫で、五撰家の一の御家柄」(黒田 1959) である。その鷹司が鳥学と出会い、やがては「鳥の公爵」としての人生を歩むことになった経緯は、学会誌「鳥」の「鷹司信輔博士追悼号」(1959) で柏原 (1988) の詳説がある。これを要約するならば、幼少のころは昆虫への関心が強かったが、やがて鳥へと向けられた。本格的な鳥学を目指すことになったのは 1911 年東京帝国大学動物学科へ入学し、初代会頭・飯島教授との出会であった。

飯島は動物学科に入学した学生に研究テーマを与えた。内田清之助に「応用鳥学」、黒田長禮に「分類学」、鷹司には「飼い鳥学」などである。こうした弟子たちの研究はその後の日本の鳥学発展に寄与することになるのだが、しかし、鷹司の場合は名家出身が故に鳥学研究のみに専念することが許されなかった。東京帝国大学卒業後に大学院に進むも 1915 年に秩父宮・高松宮の皇子傳育官に任ぜられて中退。父の死に伴い襲爵、貴族院議員となる。華族会館長 (1935)、日本出版文化協会会長 (1940)、大日本猟友会会長等の要職に就く。池田 (1959) によれば、華族会館長に就任した翌年 1936 (昭和 11) 年 2 月 26 日、一部将校による反乱軍が鷹司のいる華族会館を包囲した。いわゆる 2.26 事件に遭遇している。

戦後は明治神宮宮司となりその再建に尽力。1946 年には神社本庁統理を併任するなど肩書は際限なかった。柿澤 (1988) の言を引用すれば「頼まれると嫌と言えない性格」「家柄が家柄なのでおさまりがよい」ということになる。

鷹司は 1924 年に渡欧、1 年半滞欧の経験がある。この間、大英博物館や図書館等を回り、「日本の鳥の原記載論文をことごとく写しとって帰国」「日本の鳥に対してどんな学名を用いるかがほぼ確定した」(柿澤 1988) との評価もある。

公務多忙の中にあっても、飼い鳥の研究を継続

した。目黒の屋敷には禽舎が数棟あり、インコ類、キジ類、アオバト類など 300 羽以上を飼育していた。鷹司の飼い鳥の方法は、「小さな籠での飼育で声や姿を楽しむのではなく、可能な限り自然に近い状態で飼育し、その習性や繁殖生態を見極めようとするもので、禽舎飼いを提唱した」(松永 1959) とあるように、鳥の飼育を科学のレベルにまで引き上げようとした点が注目されよう。飼育により明らかになる鳥の習性、繁殖生態 (巢引き)、雑種の形成 (遺伝的研究) などは学術上の貢献も大きい。こうした飼育技術の向上により国内外の鳥の育雛が次々に可能になってきた。今日、飼育下での繁殖技術の向上はトキやコウノトリ等の復活には欠かせない技術であり、自然状態に近いケージ内での飼育もまた必要不可欠なものである。鷹司は研究成果を『飼い鳥』(1917、裳華房) として出版。初版 293 ページであったが、飼育に関する知見の増加とともに増補され、第六版 (1928) では 700 ページの大冊となった。黒田 (1959) は、『飼い鳥』と『飼鳥集成』(1930) とは「飼育学の二大著」と評価している。また、戦時下という困難な時代にあつて鷹司・黒田・内田・山階の共著による『大東亜鳥類図譜』(1943 - 44) の大著を刊行できたのは鷹司が日本出版文化協会会長の立場にあつたからに他ならない。死後、遺稿論文集として『日本鳥類誌』(1967) が出版された。鷹司の論著は膨大であり、黒田 (禮)・黒田 (久)・中西 (1959) による詳細な紹介があるので割愛する。

1912 年に発足した学会の会員には貴族や殿様が多く、侯爵や公爵などを冠に戴く学会であった。内田 (1959) は鷹司公爵が会頭を務めた時代について「貴族的で、普通の会員は近づきにくいという批判があつた」「しかし、それ故につぶれもしなかつた」と述べている。鷹司について黒田長禮 (1959) は、「温厚篤実の士」「お会いする人はみななつた」と記している。